
【主題】4歳児におけるサークルタイムの実践とその効果

【副題】—自発的な発言と表現意欲の変容に着目して—

【クラス名】 いるか組

【研究の目的】

近年、保育現場においては、子どもが主体的に表現し、他者と関わりながら学ぶ力の育成が求められている。特に、幼児期における言葉による表現や対話的な関わりは、社会性の発達や自己肯定感の形成において重要な役割を果たす。4歳児は語彙が急増し、接続詞を使って「何が、いつ、どうした」と論理的に話せるようになる為、自分の感情や経験を言葉で伝えたり、物語を語ったりしてコミュニケーション能力が飛躍的に高まる時期とされている。また、「相手に伝えたい」という意図を持ち、聞き手を意識して相手の顔を見て話したり、反応を待ったりする様子も見られるようになり、集団の中での発表が出来るようになる。一方で、自分と他者の区別がはっきりしてくる為、「見られている」という自覚と恥ずかしさの感情が強く芽生え、緊張して声が小さくなったり、ふざけてしまったり、「上手に言いたい」という気持ちと、注目されることに対する羞恥心の葛藤も多い時期でもあり、表現の仕方には個人差が大きい。このような発達段階において、安心して発言できる環境や繰り返し表現する機会を保障することが重要であり、保育者の受容的な関わりが子どもの表現意欲を支える要因となる。その為、「民主的なコミュニケーションの土台作り」、「心理的安全性と自己肯定感の向上」、「客観的な視点の獲得」を目的とするサークルタイムを日常的に行っていくことが、安心して発言できる雰囲気の中で自己表現や他者理解を深める機会となり得る。本研究では、4歳児クラスにおける1年間のサークルタイムの実践を通して、子どもの発達の变化を明らかにするとともに、サークルタイムが自発的な発言や人前での表現意欲にどのような影響を与えるのかについて考察することを目的とする。

【サークルタイムの意義と効果について】

- ・**主体性と自己表現力の育成**：「やってみたい」を形にし、自分の思いを言葉にして伝える力を養う。
- ・**コミュニケーション能力の向上**：友達の意見を聴き、

顔を合わせて対話することで、相手を理解し協力する姿勢を学ぶ。

- ・**対話能力の育成**：園生活での出来事や、疑問に思ったことをテーマに話し合う事で、思考力や解決する力を養う。
- ・**自己肯定感の醸成**：自分の考えが保育者や友達に聞いてもらえる（尊重される）経験が、自己肯定感につながる。

【研究方法】

サークルタイムでの子どもの様子や発言内容について担任間で活動を振り返りながら記録していく。子どもたちの実態やその時々様子を踏まえながら、サークルタイムの実施頻度やテーマ、具体的な進め方を検討・設定し、実践していくものとする。また、実践の中で見られる子どもの姿をもとに内容を適宜見直し、改善を図りながら継続的に取り組んでいく。サークルタイムを段階的に進めるため、導入期・展開期・発展期の三段階に分けて実施計画を立てた。

- ・**導入期**：子どもが安心して発言できる雰囲気をつくることを主なねらいとし、円になって座ることや簡単なゲームなどを通して、発言のきっかけをつくる方法を取り入れた。
- ・**展開期**：好きな遊びや日々の経験などに沿って発言する機会を設け、子どもが自分の考えを言葉にする力を育むことをねらいとした。テーマに関連した質問を投げかけたり、発言の候補を用意したりすることで、発言しやすい環境を保障した。
- ・**発展期**：子ども同士の意見交換や発表を中心とし、友だちの話を聞きながら自分の意見を整理し、柔軟に考えを広げる経験を保障することをねらいとした。抽象的なテーマや答えの定まらない課題にも対応できるよう、話し合いの進め方や視覚的な支援を工夫した。このように、各期の設定に基づき、子どもが安心して発言できる環境づくりから始まり、テーマに沿った発言、さらに友だちとの意見交換や発表へと段階的に発

展させる計画で実践を行った。

【研究の進め方・実践内容】

年間を通して継続的にサークルタイムの活動を行う。その中で保育者は子どもの発言に対して肯定的に傾聴する姿勢を大切にし、一人ひとりの思いや考えを受け止める関わりを意識する。さらに、子どもが安心して自分の気持ちや意見を表現できるよう、自由に発言できる雰囲気づくりを行い、主体的な参加を促していく。

【導入期：進級後の自己紹介、サークル状になくなって真似っこゲーム、サークル状での帰りの会】

進級当初は、自分から発言することに戸惑いを見せる姿が多く見られた。そのため、保育者が一人ひとりの発言を受け止めるように心掛けた。子ども達が新しい環境に不安を感じやすい時期であることを踏まえ、安心して自己表現できる基盤を育むことを目的として、毎日継続してサークルタイムを行う環境を整えた。同じ流れや決まった質問を繰り返すことで活動への見通しを持たせ、心理的な安定を図るとともに「話しても大丈夫」という安心感を保証できるようにした。子ども達にとって、サークル状に集まること自体に難しさを感じている様子が見られた。その為、無理なくサークルの形に慣れていくことをねらいとして、円になって並ぶことを目的としたゲームを取り入れ、楽しみながら自然にサークルの形を意識できるよう工夫した。また、手作りのマットを用意し、自分の座る位置を視覚的に捉えられるようにした。



〈椅子取りゲームでサークルに慣れる様子〉



〈マット作成・使用時〉

【展開期：行事や長期休み明けの思い出発表、グループ名決め、クラスのかっこいい姿についての発表、パラバルーンの技決め等】

次第に、好きな遊びや経験したことについて話す姿が見られるようになり、他児の発言に耳を傾ける様子も増えていった。一方で、子ども達は決まったテーマに沿って話すことには慣れてきたものの、異なる質問に対しては言葉に詰まってしまう姿も多く見られた。そこで、自分の考えを持つことや言葉にすることへの負担を軽減し、発言への意欲を高めることを目指し、あらかじめいくつかの答えの候補を示すことで子どもが選びなら発言できるようにして、安心して話し合いに参加できるよう工夫した。友だちとの会話に近い形で安心して話せるよう、小グループでのサークルタイムを取り入れるようにした。また、自分や友だちの発言を振り返ることができるよう、テーマと発言内容を表にまとめて保育室に掲示した。さらに、バルーンの技やグループ名を決める場面では、候補一覧をグループごとに用紙で提示し、視覚的に選択できるようにすることで、発言へのハードルを下げる工夫も行った。視覚的な支援を取り入れることで、自分の思いや考えを持ちやすくし、主体的に話し合いへ参加する態度の形成につなげることを意図した。保育者は、子どもの言葉を補ったり、他児とのやりとりをつないだりするこ



とで、対話が広がるよう援助した。

〈視覚的な支援の例〉

【発展期：日替わりテーマで意見や感想を出し合う、行事に向けた話し合い等】

後期になると、自ら発言しようと手を挙げる姿や、人前で話すことを楽しむ様子が見られるようになった。また、様々なテーマに対しても自分の考えを発言できるようになり、あらかじめ答えの候補がなくても話し合いに参加できるようになった。発言力の高い子どもが中心となりながらも、クラス全体で意見を出し合い、話し合いを進めていく姿が見られるようになった。子ども同士の対話を中心とした活動となるよう、保育者

は前面に立つのではなく、司会としての役割に徹することを意識した。具体的には、子ども達の発言を主とし、自分の考えを言葉にして伝えたり、友達の意見を聞いたりする経験を大切にしたい。また、子どもから出た意見に対して、「なぜそう思ったのか」「どのようにしたいのか」といった問いかけを行い、考えを深められるようにすると、他の子どもの意見を踏まえて「じゃあ〇〇したらいいんじゃない？」と自分の考えに固執せず柔軟に発想を広げ、別の視点から意見を出す姿も見られるようになり、相互的なやりとりも生まれていった。さらに、「年長組を送る会をどのように行うか」等といった、答えが一つに定まらない抽象的なテーマについても、自分の考えを述べながら話し合いに参加できるようになってきた。しかし、子ども達の発言が停滞したり、意見が出しにくかったりする場面も見られた為、その際にはテーマに沿ったヒントを助言することで、子ども自身が考えを広げ、発言へとつなげられるよう援助を行った。これにより、子ども達は自分の考えをより具体的にしたり、他者の意見と比較した



りしながら、多面的に物事を捉える力を育んでいく姿が見られた。

〈日ごとに変えた
様々なテーマについて意見を出す様子〉

【結果：エピソード記録】

・エピソード①

進級当初は環境の変化からか、Sちゃんは自分から話すことが少なく、問いかけに対してもうなずいたり表情で示したりする姿が見られた。また、帰りの会での発表など周囲からの注目が集まる場面では、恥ずかしさから発言に対して消極的な様子があった。そこで保育者は、Sちゃんの小さな声での発言を丁寧に受け止め、必要に応じて代弁したり、「話してくれてありがとう」などと肯定的に受け止めたりする関わりを行った。その結果、徐々に言葉を発することへの抵抗が和らぎ、

発言までにかかる時間が短くなっていった。さらに、友達との関わりが広がる中で、信頼できる友達に対しては自分から気持ちを伝えたり、遊びの中でアイデアを出したりする姿も見られるようになった。こうした姿を受け、保育者は小グループでのサークルタイムを取り入れ、安心できる友達と共に話し合いに参加できるよう配慮した。その中で、テーマに沿って友達と意見を出し合う姿が見られるようになっていった。このような経験を積み重ねていく中で、3学期にはクラス全体でのサークルタイムにおいても、自分の気持ちや楽しかった出来事を堂々と発表する姿が見られるようになった。

・エピソード②

進級当初のK君は、友達と積極的に関わり会話を楽しむ姿が見られていたものの、人前で発表する場面ではあまり積極性が見られなかった。また、友達や保育者の話に対して関心を向ける様子が少なく、自分のペースで過ごす姿が見られた。そこで、帰りの会などの繰り返し行われる活動を通して、「今は話を聞く場面であること」や「順番に発言すること」の意味を丁寧に伝え、集団でのやり取りに意識を向けられるよう援助した。その中で、次第に話を聞く姿勢が身につき、発言することにも意欲を持つ様子が見られるようになった。さらに、ゲーム遊びにおけるルール確認の場面では、保育者の問いかけに対して自分の考えを答えたり、友達に分かりやすく説明したりする姿が見られるようになった。また、話し合いの場面においても、友達の意見に耳を傾けながら「じゃあ、〇〇だね」と自分なりに考えをまとめる様子が見られるようになった。加えて、友達とのトラブルの際には、相手の気持ちを聞こうとする姿や、解決方法について一緒に考えようとする姿も見られた。これらの経験を通して、他者の意見や言葉に耳を傾けながら、自分の考えを持ち、それを発言する姿へと成長していった。

【考察】

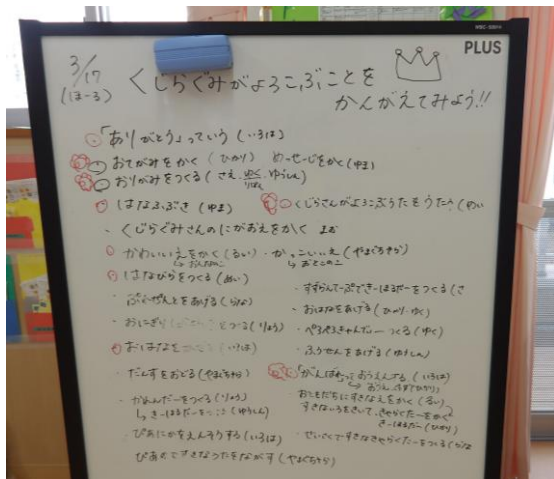
本実践において、サークルタイムは子ども同士の対話を中心とした活動へと移行していく中で、保育者の関わり方が重要な役割を担っていることが明らかとなった。また、サークルタイムを継続的に積み重ねていくことが、子どもの発言意欲や表現力の向上に影響を与えていることが明らかとなった。Sちゃんの事例からは、自分の思いを言葉で表現することに不安を感じて

いる子どもに対して、保育者が発言を代弁したり、肯定的に受け止めたりする関わりを継続することで、安心して発言できる基盤が形成されていったことがうかがえた。また、小グループでの活動を取り入れ、安心できる友達との関わりの中で発言経験を積み重ねることにより、徐々に全体の場面でも自信をもって発言できるようになる等、段階的な関わりの有効性が見られた。一方、K 君の事例からは、発言意欲はあるものの他者の話に関心を向けにくい子どもに対して、繰り返しの活動を通して「話を聞く場面」であることを意識づける関わりや、問いかけを通して考えを引き出す関わりが有効であることが分かる。さらに、話し合いや遊びの中で他者の意見に触れる経験を重ねることで、相手の考えを受け止めながら自分の考えを形成し、言葉で表現する力が育まれていく様子が見られた。繰り返し行われるサークルタイムは、子どもにとって安心できる場となり、「話しても受け止めてもらえる」という経験の積み重ねが、自信をもって発言しようとする姿へとつながっていったと考えられる。さらに、他児の発言を聞く経験や、それに応じて自分の考えを伝える機会が増えることで、単なる自己表現にとどまらず、他者との関係の中で表現する力が育まれていった。このような過程を支える上で、保育者は一人ひとりの発達や姿に応じて援助の方法を工夫しながら、子ども同士の対話が深まるよう支えることが求められる。具体的には、発言に不安を感じる子どもに対しては安心して表現できる環境を整え、他者への関心が薄い子どもに対しては対話の中で考えを深める経験を促すなど、個に応じた関わりが必要である。また、保育者が司会的な立場として必要に応じて問いかけや助言を行い、子どもの発言を受容しながら言葉を補ったり関係をつないだりすることで、子ども同士のやりとりが活性化し、対話の質が高まっていくと考えられる。以上のことから、子どもの主体性を尊重しつつ、対話を支える存在として関わるのが、思考力や表現力、さらには他者理解の育ちを促す上で重要であるといえる。

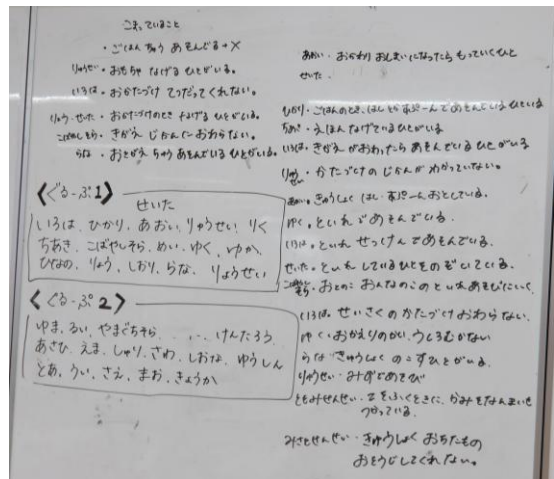
【まとめ】

本研究では、4歳児クラスにおける1年間のサークルタイムの実践を通して、子どもの発達的变化と自発的な発言および表現意欲への影響について検討した。その結果、サークルタイムを継続的に行うことで、子どもが安心して発言できる環境が形成され、「話しても受

け止めてもらえる」という経験の積み重ねが、自発的に発言しようとする姿や、人前で自分の思いを表現しようとする意欲の高まりにつながっていくことが明らかとなった。また、他児の発言を聞き、それに応じて自分の考えを伝える経験を重ねる中で、単なる自己表現にとどまらず、他者を意識した表現や対話的な関わりが育まれていく様子が見られた。さらに、4歳児という発達段階において見られる「伝えたい」という意欲と「見られることへの恥ずかしさ」との葛藤に対して、保育者が受容的に関わり、個に応じた援助を行うことが、子どもの安心感や自己肯定感を支え、表現意欲の向上を高めていることが示された。以上のことから、サークルタイムは、民主的なコミュニケーションの土台を育むとともに、心理的安全性の確保や自己肯定感の形成、さらには他者理解の促進につながる重要な実践であるといえる。今後は、子どもの姿や状況に応じたサークルタイムの活用方法や実施場面についてさらに工夫し、多様な形で展開していくことにより、より一層子どもの主体的な表現や対話を支えていくことが期待される。



〈くじら組を送る会で話し合った内容〉



〈当番決めの為に話し合った内容〉



ひまわり



まりーごーると



あさがお



しろつめくさ



じにあ



こすもす



たんぽぽ



あじさい

〈グループ名話し合い資料〉

- ☐ しーそー
- ☐ きのこ
- ☐ かめ
- ☐ くらげ
- ☐ やま
- ☐ はなび
- ☐ こっぴ
- ☐ あさがお
- ☐ はな

- ☐ ちょうちょ
- ☐ ろけっと
- ☐ めーごーらんど
- ☐ ひこうき
- ☐ こなみ
- ☐ おおなみ
- ☐ よこなみ
- ☐ ぽっぴこーん

しーそー	けんたろう	ゆうしん	りく	こぼやしどろ
あさひ	せいの	しーそー	とあ	あさひ
ちあき	しーそー	やまぐちどろ	あひ	えき
しーそー	さわ	うい	ゆく	あひ
ひかり	ゆか	うさ	しーそー	ひかり
さえ	まお	いっほ	ゆき	きょうか
しーそー	てーき:			

〈パラバルーン話し合い〉

〈サークルタイム掲示表〉